

新ムツゴロード 再び諫早湾エコツアー構想について

片寄 俊秀（関西学院大学総合政策学部教授）

防災と干潟再生へ連続防潮ゲートを

失ってみてはじめて、それがいかに大切なものであったかを知る、その典型例が諫早湾の広大な干潟であった。

閉め切り以後、有明海の異変はいよいよ進み、かつての「豊饒の海」は確実に死滅への道をたどりつつある。一昨年の赤潮によるノリ養殖壊滅の事態の発生で、漁業者たちは農水省に「水門の常時開放」による干潟復活の要求を突きつけている。有明海の病み具合は重症で、もはや常時開放だけでは治癒できないところまで来ているが、諫早湾の干潟復活は再生への第一歩としてきわめて重要と考える。

諫早干潟の土は粒子が細かく、ぬめりような泥質で、生き物には棲みやすい環境であった。一夜に数万羽もの鳥が羽を休め、表層には無数のカニやムツゴロウ、トビハゼ。少し掘ると貝類やゴカイがうじゃうじゃいた。たしかにつり餌にもならぬ「ただのゴカイ」や、つぶして「ガネみそ」にする以外に使い道のない「ただのカニ」、鳥類もたまたま貴重種が居たが、たいがいは「ただのトリ」だった。

しかし何もいなかったわけではなく、無数の微生物をふくめ、たくさんの種類の生き物がやたらに生息していたのが諫早干潟だった。単位面積あたりの生物量は地表のどの部分より大きかったのではないかと。そしてこれらの生き物たちが湾に流れ込む汚水や有明海をただよう有機物を分解してくれていた。いわば巨大な浄化施設でもあったのだ。

すでに淡水化が進んでいる湾内に潮を入れて、はたして干潟は蘇るのか。これについては韓国のシファ湖の先例に見るように、かなりのレベルまでは急速に回復する可能性が高い。海にただようさまざまなプランクトンのうち、当初の環境を好む連中がまず棲み着き、遷移を繰り返して徐々に元に近い生態系が復活するというストーリーである。

諫早湾が1996年4月に例のギロチンによって完全に閉め切られる前の、同年1月27日付けの本紙上に、筆者はまだ間に合う対案として「諫早湾エコツアー構想・

ムツゴロードづくり」を提唱した。

地先の小規模干拓を実施し、内部堤防とポンプ排水の強化で既存農地の高潮対策と内水排除を講じる一方、干潟を保全することで育てる漁業とエコツーリズムで地域活性化をはかる。投入された膨大な公共投資を無駄にしないために、堤防をとこところ切って橋梁にして潮の出入を確保しつつ横断道路を建設し、雲仙普賢岳噴火災害で経済的に疲弊している島原半島と九州横断道路を最短経路で結ぶことで、九州観光の再活性化をはかろうというのが提案の内容であった。この提案は、各マスコミにもとりあげられ、行政監察局からもヒアリングを受けるなどかなりの反響を呼んだのだが、残念ながら閉め切りは強行された。

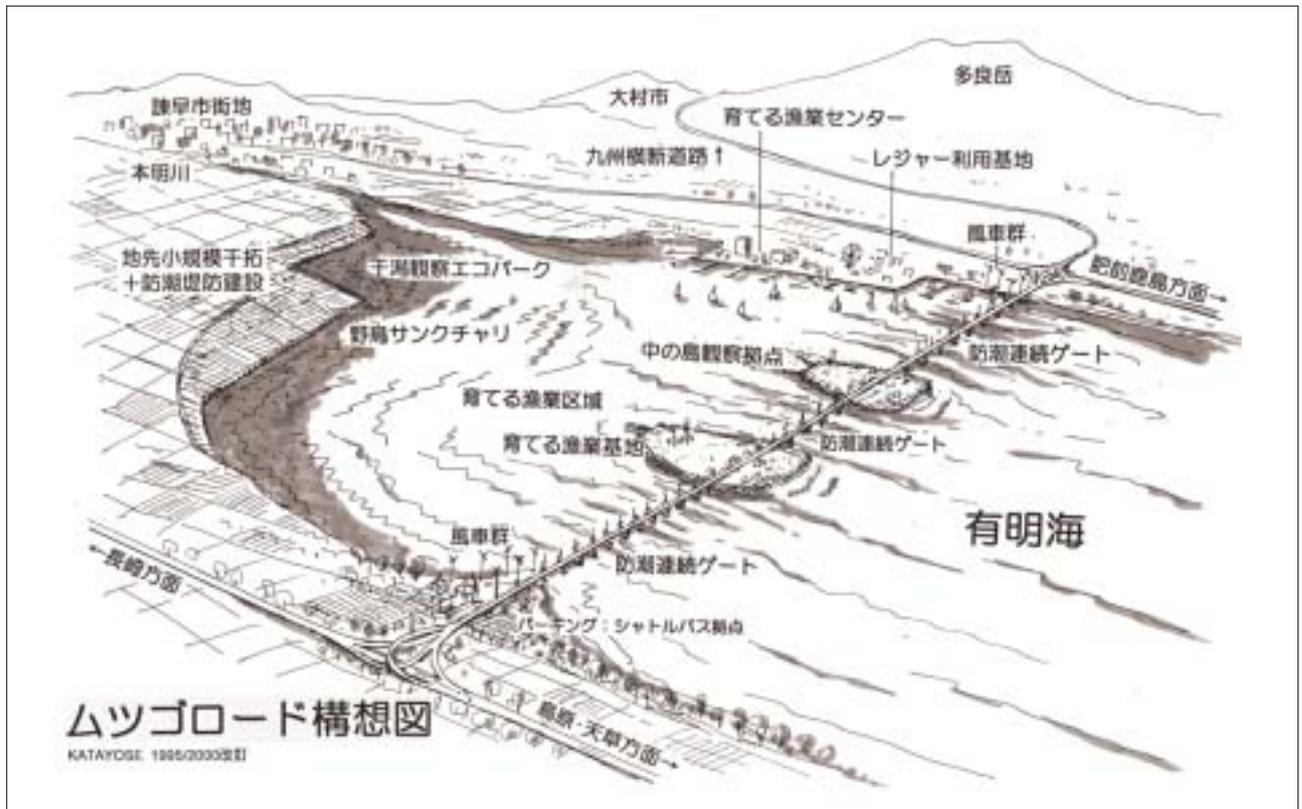
現在、長崎県当局は現堤防の上に道路をつくる計画をすすめ、農水省は国営事業再評価第三者委員会の「事業見直しの必要」の答申を受けて、干拓で造成する農地面積を縮小する案を長崎県に提示。長崎県は「開門調査は反対」の条件付きでこれを了承した。一方農水省がその意見は尊重すると明言していたノリ不作等対策関係調査委員会は「開門調査が必要」との意見を出し、これを受けて農水省は地元の了解をとりつけて四月から調査にかかるという。

かくも意見が衝突した状態で、どう打開の道を開くのか。筆者から見れば、その方向は明白だ。もともと農水省のお手盛り計算でも事業の「費用対効果」の数値が1.01という成立ぎりぎりの事業であったところに、このたびの造成農地縮小で、もはや干拓事業は成立の根拠を失った。これを思い切って中止し、防災対策と干潟再生に向けての諸事業を、国の責任で実施することである。

まずは、現在の水門を利用して潮を出入りさせて徐々に干潟回復をめざす必要があるが、地盤沈下などで内部堤防が相当傷んでいるので、防災のために雨期には内湖の水位を下げておかねばならず、本格的な干潟回復には遠い。

そこで筆者の提案は、堤防のかわりに高潮時だけ開める「連続防潮ゲート」の設置による「ムツゴロード構想ニューバージョン」である。

この方式はエコロジー政策への転換で干拓を中止し



汽水域を保全したオランダのスヘルデ河口で1987年に実現し機能しているものにヒントを得た。普段はゲートを開けていて潮の出入りは自由で、高潮予報を受けて年に一回程度ゲートを閉め切る。台風時にはゲートを水面まで下げて波浪を防ぐ。

北海の荒海に面したオランダでは難工事だったが、諫早では今の潮受堤防を基盤に施工できるから、技術的には格段に容易だろう。これだと延長の長い内部堤防の改修は最小で済む可能性があり、経済面でも有利だ。また潮受堤防を全部ゲート方式に変えなくても段階的にゲート部分を増やしていけばよく、この点でも実現性は高い。



オランダ南部スヘルデ河口の連続防潮ゲート

毎日新聞（2002年1月18日）から転載